



扶桑皇統記圖會  
後編  
五

遠  
2505  
13-12



遠  
號 2505  
\* 13-12

扶桑皇統記圖會後編卷之五目錄

陽成院御即位

菅家系譜角力盪觴條

野見宿稱當麻蹶速と力競への圖

春彦是善俱感奇夢

於良香宅菅公試射條

陽成院憲鈞殿君御製

狂病乱行閑居條

異形のものど並て鈞殿の后と魘ふ圖

光孝天皇御即位

行平詠述懷歌被為謫條

行平須磨の浦まろをむらさき松風村雨ふり小戯あそぶふるる圖

清和上皇御登霞あまのついで禁庭種たね怪異あやふしの條

都良香得鬼神奇句あまのついで菅公一時作つく十詩條

羅生門らせいもん於おて鬼神きしん都良香ついでが詩うたと嗣ついでぐ圖

醍醐天皇御即位あまのついで時平乱行ときひらみだり奪叔父妻うばをうば條

目錄終

扶桑皇統記圖會後編卷之五

浪華 好華堂野亭参考

陽成院御即位

菅家系譜すげけいふ角能かくのう濫觴らんさう條

貞觀十一年じゆんくわんじゅういちねん小大納言せうだいなごん藤原氏宗ふじわらじゆんげしむね參議さんぎ大江音人おほえのねひと刑部卿けいぶけい菅原是善すげのりぜん三人

負觀格ふくくわんかくを撰せんで奉ほうりり列位れつゐ當時たうじの博識はくしきなりなり日十三年ひみそねん八月はつげつ源融げんじゆうを左

大臣だいじん藤原基經ふじわらききけいを右大臣みぎだいじんとせせれるれる此こゝ基經きけいとと八前條はつぜんじょう述のたまふふ藤原

良相りやうしやうの婚むかひしてして双ふたなりなり知能ちのうの人ひとなりなり則すなはちち藤原時平ふじわらときへいの父ちち小こ薨去こうきよの後のち昭宣

公こうとと益えきせせれれ名臣なぢんなりなり又また源融げんじゆうとと中なかつ嵯峨さか天皇てんかうの皇太子すめみま小こて人臣ひとぢん小こ下くだりりあり

嵯峨源氏さかげげんじの自異みづかひ組ぐみ小こて此こゝ大臣だいじん陸奥りくお松島まつしまの千賀ちがの浦うらの風景ふうけいと愛あいして六条院ろくじょうゐん小

千賀ちがの浦うらの地景ぢけいと摸もしし大おほいい池いけを湛たんんてて拱州かうしゅう難波なんばの浦うらより毎日まいにち夕ゆふの潮うしほと都

運うせせ六条院ろくじょうゐんの池いけ小こ溜たまり没なげげ延のびびび女め小こ汲くみ汲くみせてせて樂たのししいいなりなり因よてて六条院ろくじょうゐんと川



原院ともいふ大臣と川原左大臣と稱せり源氏物語小何がの院と書し由此川  
原院の更なり。同十八年十月清和天皇室祚を春宮貞明親王承継りし御  
身八仙洞へせり後水尾山へ入て佛道御修行ありし由水尾帝とせり  
御在位十八年なり。貞明親王御年八才して帝位小即ち此君を五十七代の帝  
陽成院と奉る。即ち清和天皇の皇子して御母皇太后藤原高子とす故  
中納言長良卿の女して右大臣基経の妹なり。世小二条后とす是なり。陽成帝ハ  
貞觀十年小降誕在。同十年春宮小立まり。儲室祚を嗣めし頃大極  
殿燒失せり後たれむ。修理成就せりて豊樂殿小於て太常會の大禮  
を執行せり。曆号と元慶元年と改元あり。二年出羽國小夷賊蜂  
起。之れを征東使を下され。同三年夷賊誅小伏。連乱平定。多征東使都  
凱陣。同四年太上天皇。丹波國水尾山へ入。同五年在原業平卒。寺

此人阿保親王の二男中納言行平の舎弟小。美男のせえ高く歌道の達人なり  
邁齡五十七才なり。同十月右大臣基経を撰政小任せり。同七年正月渤海國  
乃使者斐題といふ人來朝。鴻臚館へ入。此頃菅原道真卿  
文章博士とせり。唐使と應對する程の才能の人無を以て道真卿と  
小治部太補とせり。斐題の接伴使となりし。治部ハ異國の更を告る  
官あり。更なり。之れを道真卿接伴使となりて斐題と詩の贈答あり。之り  
ゆひたる。小斐題其俊才高作を入て。唐の白樂天の風韻有とぞ感。多  
斐題と道真卿との贈答の詩數多。中。小殊小其才え高。る。ハ  
贈醉中脱衣斐大使  
吳花越鳥織初成 本自同衣豈淺情 座客皆爲  
君後進 任將領袖屬斐生

其その余よハ是これを略りやくす。斐ひ題だハ道みち真ま卿けいと心こころ恨うらみなく睦むつび交まじりあるが。一いつ時とき道みち真ま公こう向むかひ  
 子こ執しやく心しん公こうの相あひ親しんをあらわる小ちひ大た貴き相さうあらむす三さん公こうの位ゐ小ちひ昇しやうのあらわるは也なり。然しかども久ひさ  
 く高たか官くわん小ちひ居いわる遂つひ小ちひ御ご身み小ちひ禍わざはひ及およぶは也なり。官くわん位ゐ昇しやう進しん一いつくとも早はやく  
 官くわん位ゐを辞しして其その禍わざはひを避よくめり人ひととあらわれし道みち真ま卿けい承うけあらうて其その厚こう情じやうと謝しやうめい  
 々さるが。後こう年ねん果はして斐ひ題だの先せん見けん遠とほざり々さる。斯かくて斐ひ題だと内うち表へい言ごんと御ご卿けい食じき應おう  
 ありて後のち御ご暇げんを給たまへりて帰かへ國くに一いつ々さる。抑おさ菅すが原はら道みち真ま卿けいとハ文ぶん章しやう博はく士し刑けい部ぶ卿けい  
 菅すが原はら是これ善ぜんの御ご息しき男なん小ちひ。其その先せん祖そ神かみ代しろ天あま穗ほ日ひ命のみこと御ご子こ天あま夷ひら鳥とり命のみことより出いでり  
 天あま夷ひら鳥とり命のみこと一いつ名な武ぶ日ひ出いで雲う國くに小ちひ天あま降くだりし天あまより齋いひ一いつ所ところの神かみ室むろを杵き築つたの神かみ宮みや  
 小ちひ納なりし杵き築つた神かみ宮みやハ今いまの其その十じゆ二に世よの孫まごを鷗う濡ぬ淳じゆん命のみこととなせり。是これを出いで雲う乃なり國くに造ぞう  
 と定まらる鷗う濡ぬ淳じゆん命のみことの弟あにを其その美み乾けん飯い根ね命のみこととなせり。其その子こ之の野の見けん宿しやく祢ねと云いて  
 天あま性しやう智ち才さい方ほう也なり。親しん小ちひ事じて孝かう心しん深ふかく。然しかも力ちから量りやう衆しゆ小ちひ勝かちる。曾そうて幼ちひ年ねん乃なり順じゆん父ふ

小ちひ後ご成せい長ちやう小ちひ隨ずいハ母はは小ちひ事じて至いた孝かうなり。日ひ御ご小ちひ勝かち向むか太たい息しきと呼よぶ。壯さう士しあり。是これも野の見けん  
 宿しやく祢ね小ちひ劣じやく力ちから小ちひ士して生な得とく義ぎを好このむ。宿しやく祢ねと莫もく逆ぎやくの友とも小ちひ。胞ほうのあらわる睦むつび交まじりある  
 其その頃ころハ人ひと皇みかど十じゆ二に代だい推おし仁にん天あま皇みかどの御ご宇う小ちひ。纏まと向むか珠しゆ城じやう宮みや小ちひ皇みかど居いなり。小ちひ禁きん門もん乃なり衛ゑい護ご  
 のあらわる。天下てんかの力ちから者ものと梓しり御ご門もんを固かためしる。其その中ちゆう小ちひ大たい和わ國こくの任にん人ひと小ちひ當たう麻ま蹶けつ速そく  
 といふ。大たい力ちからの者ものありて。誰たれあらむは蹶けつ速そくが力ちから小ちひ及およぶ者ものハ。是これ小ちひ依いて禁きん廷てい言ごんと御ご  
 門もんの固かためしる。多おほくの食じき田でんを賜たまへり。小ちひ蹶けつ速そくハ己おのが力ちからの勝かちる。然しかも天あま下か小ちひ  
 我われ小ちひ敵てきする者ものナしと。繕かこり。朝あさ廷ていの高たか位ゐの人ひとも。小ちひ兒このあらわる欺あまむ。然しかも慢まんり頗おほく無む礼れいの行ぎやう条じョウ  
 我われ慢まん小ちひ募ぼり。朝あさ廷てい小ちひ人ひとをあらわる如ごとく動うご止とまする。其その義ぎ後ご小ちひ睿ゑい聞もん小ちひ達たつ一いつ帝てい也なり。蹶けつ速そくと憎にく  
 疎そんだり。渠かれと故ゆゑなく追お追お退たいけしる。乱らんを起おこす。人ひと更さらを慮おぼえしる。是これひて睿ゑい慮りよを煩わづらしめり  
 小ちひ臣しん下かと召めい集じふらして勅しやく詔しよ一いつ々さる。諸しよ國こくの中ちゆうに力ちから強かう死し者ものと召めい上じやう一いつ蹶けつ速そくと力ちから

競をさせ其者小蹴速負あはれを名とて渠と追退けたり。諸臣下奉り  
 諸國觸るる者力者とて召募られ。然も皆蹴速が怪力を用怖と我召  
 小應せんとい者あはれ。彼野見宿祢朝廷の御觸渡を承りて思ら。當  
 麻蹴速何者ぞれをまわと朝廷の君臣と煩。我君の為彼蹴速と力競  
 一渠奴を投殺して帝の宸襟を安んじり度あれ。如何せん今我母患病有  
 て病臥を是を見捨て召小應せん不孝なりと思煩。多小念ち朋友の小  
 勝間太息来りて宿祢小向ひ今度都より諸國の力者と召れ當麻蹴速小勝速  
 を得む召抱て食禄を賜らん。御觸なり。我斯片鄙の國小住て徒小舟木  
 と俱小朽果ん。召小應て都上り。彼蹴速と力競せん。如何とい  
 くれ。宿祢申て我疾より其心ふれ。我母病小深り。我意小任せ。足下小  
 兩親もあはれ身あはれ疾召小應。蹴速と力競。運小勝小勝を身の昔

雲といひ弟と帝の宸襟を安んじり。忠勤なり。急死思ひまはれ。勸れ。太  
 息悦ひ宿祢小別を告て。出雲と我足と都上り。朝廷の官人小就て蹴速と競  
 力。願ひれ。早速官人より其旨と奏聞。勅許有。小内庭上  
 小相撲の場を。蹴速太息兩人を呼出。競力。た。命せ。小蹴  
 速ハ心中小嘲。此奴出雲より遙と死と望で上り。不便。えよ  
 一脚小蹴殺し得せん。飽よ。裸なり。積鼻禪の細曳。角力乃  
 場。出。太息。裸。堂上。帝出脚在。脚。垂  
 て勝負と睿賢なり。小大。小大臣。位。依。列。座。堂。下。小諸。下  
 官群りて見物。先。蹴速が体を。小身材。七尺五寸。色。飽。黒。眼  
 星の。光。鼻。隆。準。鬼。鬚。肥。の。小。生。手。脚。の。毛。熊。の。所。小。力。痛  
 し。と。節。立。か。金。剛。力。士。の。怒。如。又。小。勝。間。太。息。小。身。材。六。尺。四。五。寸。小。て

色浅黒く鼻高く眼秀満身肥太りて是も手脚小力溜あまると頭も天晴の  
力者と見えたり。上下の首官何方が勝何方が負べんと行唾を吞息を詰て内  
小頓て兩人互にお互上り寄つて多れつ皆一先争ふと云る間も双方  
無手と引組押つ戻つ様合程小両士とも布代の力者多れを大地をどろくと踏鳴  
一互の汗を滝のどろく曳や声を出し半時むろ挑合れどもいまだ勝負多きを  
を諸人酔るごとく半小汗握て瞬もせざる所小太息が運や尽さるる。蹶  
速の腕を相一汗腕汗小にまでわれをと思むと云る所を早く蹶速が付て雙  
身の方と腕小入大喝して唾と突れどもさゆの小勝向三回後(詭)り什々る小蹶  
速速さず飛くを。鉄脚を揚て太息が腹肚を續さる小三脚むろ踏多程小何  
うハムて堪るべれ忽ち肋骨と踏碎れ太息其終二言とも言ど庭上あて死にたり  
たり。帝ハ是を睿覽在り僧一と思召蹶速勝負小勝りむ。睿慮悦ひひんす

脚不與氣入脚なり。諸卿とも蹶速を心疎れを天晴小勝向勝よ  
うと祈らぬ人もあり。ふ業小相違と蹶速勝をとり。列位望を失  
ひ誰一人蹶速が勝を譽る者もな。堂上堂下あけ交り太息が屍をとを  
収めさせ其日の角力皆止り。それより蹶速の愈慢心増長し朝廷の公卿小非  
礼をなす吏公前小十倍。多由満朝の百司百官未々の下郎小のりまで。渠と  
疫病神のどろく忌悪々々。去程小勝向太息蹶速が為小角力小負其場小々  
落命せり更緒國小隠たり。出雲國(中)まえを野見宿祢大少蹶速太息  
が死を悼み蹶速が挙動を憤るも母の病いづ平愈せられ牙を咬でど目と  
送りたる。其小宿祢が母日小患病薄られれ。一日我子と呼てやせらるる。先頃  
より人の風貌小ハ你が友の小勝向太息都て當麻蹶速といふ人と競力を  
對手小負て命を亡ひ。いも便なれ吏たり。你と太息とハ兄弟よりも交り深

其仇をも復さず他小史捨る義小跡小似さる具太息が妻及び渠が  
 親族も你を言甲斐なりと悉むる此頃我患病日小思り今平愈す小  
 程あつた。され我病を念ふ小けと。日早く都上り彼蹶速と競力をかりて  
 太息が仇を復せよ最も勝負ハ時の運小れ。你彼蹶速のさ小力競  
 小肩て命と落とも朋友の信ハ益。疾思ふ。義を勸励。其素リ一命と  
 宿称大小始ひて拜謝。是ハ難有御教訓を蒙リ。其素リ一命と  
 抛太息が為小讎を復まる。我母患病小深。を見捨  
 ち。子との道小あす。朋友の信も孝道小換。今日まで黙止。小  
 小母の病追々息り。今上。御暇を給り。上。都上り。蹶速と力と  
 競。小。俄小奔足の準備。親族家僕など小母の身の上を困小。の  
 ち。老母小辞を告て邸舎と。出勇。進んで都を望。路を急。往。

浪速國。今。著。當國小跡を垂。任吉明神。老母の  
 無吏を術。且今度都。蹶速との競力小勝。吏を得。丹城  
 を凝。初念。大和國珠城の都。上り。官人小就。是。出雲國の任人  
 野見宿称と呼。者。當麻蹶速と力と競。遙。上り。向。望。此。日。と  
 奏。聞。願。執奏の官人承諾。右の由奏聞。小。即ち  
 勅許あり。官人蹶速を召出。宿称と競力小。言渡。小。蹶  
 速。議。及。領掌。退。心。中。小。独。笑。野見宿称と中。人。彼。太。息。が。我  
 一脚。下。小。命。と。落。せ。不。知。人。我。と。力。と。競。人。吏。を。望。火。小。入。夏。の。虫。小。ひ。く  
 好。人。で。其。身。を。亡。さ。ん。と。す。思。さ。よ。己。中。思。ひ。人。小。中。言。達。て。其。日。遲。と。待  
 小。多。斯。禁。廷。の。先。例。の。殿。前。の。大。庭。小。競。力。の。場。と。構。帝。高。座。小。出。脚  
 在。百。司。百。官。堂。上。堂。下。小。忝。列。吏。已。小。整。ひ。小。官。人。蹶。速。宿。称。而。人。を



呼出カを競る由を命ず。兩人低頭して令と受俣お退き衣履を  
脱赤裸小なりて立出る。蹶速が人表へ前小述れは及ず。野見宿祢如  
りある人品と見小身材六尺七寸。色白く月秀手脚の力痛節立彼太息  
小比とれが段勝一壮士あり。それも蹶速小比て尚見劣せれ多小。諸人  
中小危も勝負如何あんと手小汗握く見物せり。去程小兩雄互小一揖しや  
うけ声するや否俱小寄合して剣合追廻。組解つ争ふ。蹶速六十分  
小對人を見慢り。一様小拉付んとすれ。宿祢天性往捷の達人ある上。機人  
小勝れ。壯士も對人の虚実と考呼吸を量り。或透一或透廻りて千  
變万化の手と確た蹶速が疲る。待ふる。案のて。蹶速六分。小勝と  
とんと思ひの外宿祢が。小澤られて六十分の精力を勞。大も怒り。面  
色大のどなり。頭上小煙を立叫ひ吼りて。擱らる。宿祢尚も。裸り透

前小在る。それ勿忘。馬として後小廻り。左小在る。それ勿忘。右小出其疾。ま  
蝶鳥のくくもれ。蹶速く見留る。吏能。宿祢精神疲。呼吸已小早鐘  
を撞が如。宿祢ハ蹶速カの撓と案して。一点の透間を付入惣身カを  
腕小入大喝一声曳やと言さ。蹶速が胸板を嚙と衝を。さ。その大の濃屏風  
を倒す。ぐ。仰さ。小喘と。宿祢ハ透さ。走り。カ脚と揚て。蹶速  
が肋骨と續さ。小蹴更四五脚。然の。敵の胸板を臨。盤石の確よと  
カと究て。踵と踏。何ん。堪。蹶速ハ胸骨肋骨と踏。折。叫。苦  
し。目。鮮血を吐。手脚を張。其。息。絶。是を。堂上。堂下。の  
公卿大夫。下官。小。追。さ。や。さ。と。譽。る。声。遠。近。小。震。ひ。て。少。時。小。鳴。り。止  
む。下。郎。の。輩。日。来。悪。と。執。小。蹶。速。が。肩。を。成。嬉。と。庭。上。小。躍。舞。中。の。其  
屍。の。際。へ。寄。て。土。砂。を。蹴。ら。る。も。あ。る。唾。を。吐。ら。る。も。多。ら。る。宿。祢。ハ。念。願。乃。如



野見宿祢



野見宿祢  
當麻蹶速  
力競の圖

當麻蹶速

皇統記圖會卷五

太皇の仇を復して心中大い悦び殿上の御簾の方を三拜し徐々として退たるる  
帝甚く感感在り改て宿祢を階下召よみ以後八禁門守護の役を勤むべき  
りの宣言と下され執政の大臣小殿速が一族を追拂ひ其所領の地を悉く宿祢  
小少殿と勅詔ありしは是れ依て宿祢の思ひより朝廷の臣下となり  
多くの采地を得て怡々更限たり深く君恩を謝しきりり殿速が宿祢の爲  
小其腰骨を踏折まるとして當麻の田地と諸人腰折甲と言ひたりとある  
宿祢と殿速が競力本朝相撲の起源となりて其後朝廷へ折り緒國の力者と  
召よみ競力と名づく由せよせよの成りたる然るもいよ定りたる式法と  
ありりりと野見宿祢時々小考り相撲の式を定め又角力の平と定る所  
相投緊捻旋の四平なり平小各十二年づつの変化ありり四十八年となる是れ近の  
競力ハ力量の強弱を競るものと中と稍もすれを對人を投殺し蹴殺しなど

志んども斯て六國争の基ありて人を損をれを甚く宜しき事にて對人を殺  
更堅く禁じり。され其以後、角力小對人を殺す更止り。此野見宿祢が  
則ち菅家の鼻祖にて相撲の祖神と仰げ出雲の大社の末社の中小祭られ亦  
泉州石津の社の撰社小大野見宿祢命と宗祭たり角力道小依人の心と  
尊信す命を神たり

因小日朝廷相撲の節會ハ皇四十五代聖武天皇の御宇神龜三年七月  
二十八日初て緒國の力者と召よみ禁廷小於て角觥とせり是れ角力の  
節會の起源なり是より年中行更の二つあり朝廷より緒國ハ力者と召抱小  
遣り官人を部頭使と稱り猶相撲の式別小書と著し委し述をれ  
を茲小畧とす

俗も野見宿祢ハ故郷の孝母を迎りて孝養とす。勿論朝家小事て忠勤と

尽しを帝の御覺も他の勝も追々官位を進めり。茲に禁廷の皇  
 后日葉酢媛命崩させり。大和國狭々城の盾列の池前の陵に葬り  
 たり。帝と定めひつる。此頃まで八狗葬とて上古の悪風義遺り。帝は  
 女御小御身近き事なり。公卿女臣其帝其女御崩すを生かす御葬  
 リ小狗ありありあり。帝仁此狗葬の義を深く悼ませり。此義を相止む  
 中や右と群臣と曰て勅問あつる。小往古より為まされる式法あれ。今更奈  
 何も傳すべしや。中より満座の公卿冠を傾け維々入勅答言上る人  
 中。時小野見宿禰階下小糸使と先刺より諸臣下の勅答と如何奏聞有  
 や。耳と頷て聞居られ。小人も言と發する人あれを見。堪て言と發し  
 小臣の愚見も。悼あれども。心中存存。上旨と啓奏せ。忠勤あらず。依て  
 愚案の趣を述ゆ。抑狗葬の更往古より。の式法と。中せども。陵に生

か。人を理殺。人々不仁の甚。義と。單臣が愚見。依を填土。以て  
 狗葬せ。る。程の土偶を造り。それを狗葬。象。りて。陵に埋。れ。其人  
 小。御暇を給。り。宮中。と。出。り。わ。り。狗葬の式法。相。立。數。十。人。を。埋。り。殺  
 する。も。及。む。後。代。も。勤。仕。と。る。人。の。大。患。と。除。死。仁。恕。の。道。を。推。弘。の。一。端。と  
 も。成。り。ん。と。言。上。り。を。緒。卿。実。中。と。心。付。帝。斯。と。執。奏。せ。れ。る。小。帝。御。曰  
 て。御。感。斜。あ。ず。実。い。ふ。も。中。せ。り。如。此。人。を。朕。も。何。を。患。ふ。べ。し。急。に。宿。禰。公  
 命。じて。狗。葬。す。べ。し。男。女。の。形。及。び。牛。馬。と。主。公。て。造。り。せ。り。と。勅。詔。か。り。又。執。奏。の。公  
 卿。王。命。と。奉。り。宿。禰。宣。旨。と。中。せ。り。宿。禰。領。掌。宿。所。歸。り。出。雲  
 飛。馬。と。主。り。土。師。三。百。人。を。呼。上。り。自。己。指。揮。し。て。多。の。人。形。牛。馬。緒。の。調。度。と。て  
 不。日。小。造。立。を。朝。廷。へ。献。り。多。を。帝。膚。覽。在。り。と。御。欣。び。淺。く。ず。此。物。を  
 葬。り。小。狗。に。せ。埋。む。先。格。を。失。ひ。と。又。生。る。者。と。埋。殺。小。及。む。一。舉。兩。得。の。も。り

らハ仁道是小過とらハ仁道是小過と御賞美在と御賞美在御葬送御葬送の式滞の式滞りハ相洛りハ相洛る事  
今度殉葬小預今度殉葬小預る命ハ公卿女官命ハ公卿女官ハ今や生今や生かぐ埋葬かぐ埋葬らる事ハ  
小野見宿禰小野見宿禰が妙業が妙業依依て殉葬て殉葬と免免れ皆死皆死る身身の蘇蘇ハ心地心地恨恨こ限限  
かく衆人衆人蔭蔭かぐ野見宿禰野見宿禰を伏拜を伏拜神神ののとて尊とて尊す事

因因小右殉葬小右殉葬小當小當り男女男女命命助助る事ハ且且葬葬小殉小殉ハ休休めぬ事  
小右使小右使れん更更も觸穢觸穢の悼悼り有有と悉悉く御暇御暇を給給り別別一村一村と文文住住め  
のハ是是を尸村尸村と村村上上古古の人人是是と婚姻婚姻事事火火を俱俱せらる事事今  
宿宿とハ穢穢村村のの甲甲申申む者者ハ古古の尸村尸村カカと云と云く

借借も帝帝ハ野見宿禰野見宿禰が今度今度の功績功績を深深く御賞御賞譽譽在在御思御思賞賞りて大和大和の國  
菅原菅原伏見伏見の里里を賜賜り土師土師の職職任任ぜられ土師土師の姓姓を賜賜り野見野見依依て野見野見  
見宿禰見宿禰ハ世世小美目小美目と施施し菅原菅原の里里小移住小移住野見野見の姓姓を改改て土師土師臣臣と自稱自稱

朝廷の御葬式の更をを掌りける

評評小孔子小孔子曰曰く備備を作作る者者夫夫後後亡亡ん事事是是其人其人小類小類する者者と作作る者者以以て  
たり然然ども宿禰宿禰の如如是是と且且同同く論論ずかむと埴物埴物と造造りて殉葬殉葬小  
換換幾干幾干の生靈生靈を助助る更更莫大莫大の仁德仁德なり先哲先哲も是是を仁者仁者の勇勇と謂謂  
命命と答答置道置道と云云宜宜あむ其其裔孫裔孫代代朝廷朝廷の臣臣下下小列小列今猶今猶連綿連綿と  
昌昌り更更是天是天の報應報應と可謂可謂己而己而と云と云く

春彦是善俱感壽夢 於良香宅菅公試射條

土師土師臣臣より千世千世の末孫末孫と從五從五位下遠位下遠江介江介土師土師古入古入と謂謂り然然小古入小古入と  
思思れ先組先組る野見宿禰野見宿禰埴土埴土を以以て土偶土偶を造造り殉葬殉葬の生靈生靈と助助と云と云く  
て土師土師の姓姓を賜賜り我世我世小至小至る事事今今の世世土師土師ハ葬送葬送小預小預る者者の名名小心小心快快く  
と不如不如居住居住の地名地名と姓姓小せんハと一通一通の生言生言状状を造造り時時の帝帝光仁光仁天皇天皇ハ捧

て土師の姓を改め菅原と姓賜ふん東を願はれを即勅許ありける也古人  
 怡ひ其より土師を改め菅原とせしめし時小天徳元年菅原清公  
 といへり博學多才とて大學頭小任せし清公の子息と是善とせし是  
 子と學才秀れを文章の博士大學士小任せし是善卿曾て妻伴氏と  
 娶れ夫婦の中睦まほれも如何なる事や年々重れも懐妊の沙汰あり  
 くれは是善卿是を愁ひし伊勢大神宮の神官山田の渡會春彦位下代  
 菅家の脚師ありて内外西宮世継の男子と授けり是等祈禱せん家士  
 嶋田忠遠といふ武士と使者とて勢州山田下春彦小世継の男子祈願  
 義と頼り遣されれを春彦繼で領掌し其日より沐浴齋戒て西宮と私宅  
 へ勧請し菅家世継の義を丹誠を凝し祈りけるふ七日満する夜の曉小春  
 彦不思議の靈夢を見し所は高天原と覺し是等の緒神在せる中より

六七支の神童と出づ春彦小向ひ你菅家のくも小世嗣を祈る更願あり  
 也天帝其丹誠を感れぬ丸を以て菅家の世嗣とありぬ彼家小  
 生とたを且暮你と睦み交るるやと告めんとて夢覚るる春彦大  
 怡びて想らぬ夢ハ臟氣の二ツより事小と思ふ事とて思ふ事を為すべし  
 更ありといふも是ハ神明我が誠心を感納在り氣と云ふところの正夢小疑ひ  
 とて兩宮と拜し祈願成就の悦びの祝詞を上靈夢の事と菅家言上を承  
 和十二年夏のより山田を發足と都の上りたる也小菅原是善卿ハ世嗣祈  
 願の義と渡會春彦小頼も自身も朝夕伊勢西皇大神宮と心中小祈念せ  
 られるる小承和十二年夏月上旬一夜の夢小館の庭中と道遙せしるる  
 遣水の上なる處の肩小羊の頭五支をよりある位高丸重子の容貌美麗れ  
 然と傳ふ居る由は是善卿夢心不思議小思はれ你ハ何國より來りける也母

何國の雄とて同じたる小童子袖をうけ合せ九六父中母中君の子と  
 あまなりく此処へ来りて其子とてあまひて慈愛を垂りて長者と答  
 たるは是善卿大少悦あり是天子此子と授我家名を相續せしむ  
 ちんとお點首よくこと来りていふ予も家を嗣すべし男子をわが今より  
 你をすすめんと抱えんとて館へ入ると思ふれを忽ち眼覚て一場の夢なりけ  
 り是善卿大少望を失れ諸の予年来世嗣を得ん吏を欲せぬなる思夢を  
 せんうと本意なくおひて二兩と過されなる小の渡會春彦勢則より上り  
 来り是善卿小錫とて靈夢を蒙りしと結りたる小は是善卿奇異の思と  
 せん斯て予共夜中思夢にあはれ正夢なりとて頼母くおひ春彦  
 小ハ多の引出物とて啼りぬらるる果と北堂伴氏其月より妊娠ありしを  
 是善卿怡び斜めんと胎養遺る方なく心成深月の満ちぬ指と喜て待れる小

程かく其年中暮て明とて承和十二年乙丑正月北堂聊中産の悩む平小玉  
 の下は男子降誕あり是善卿の御悦ハハを更なる館の上下男を怡むすと  
 り者かく一門縁体の人より慶賀の使者門前市とわたり是善卿ハ望の如  
 く世嗣の男子と儲へ更偏小渡會春彦が祈禱の丹誠小因とてろりりとて平産  
 の更と使者とて勢則山田の春彦が方告知されしを春彦の大少悦び使者  
 とは道とて祝の爲都上りたりは小菅家小誕生の若君何なるの由や出生の  
 後昼夜啼むつりて止むず是善卿御夫婦是を厭れ薬湯を用ひ或神の  
 守札佛の咒符わたり成掛させ百般手と竭されしを直して其險中かく啼むつり  
 更止むりしを皆始とてあまされなる小渡會春彦ハ使者と伴して京者  
 菅家へ参上て若君の御誕生を慶賀しおの昔あれは是善卿願ひ北堂の両舎  
 へ参り若君の御良を見し小誠小玉の御男子小ては先年夢ありし

神童の面貌小露違はれ心中奇異の思ひをおすち若君例のごとく頻り啼き  
 ふふより春彦其色を問む乳人等御誕生あつてより以来昼夜とも啼むつり  
 夕ハ醫者加持祈祷百般手と尺せども啼止むざるよと詰るふと春彦懊惱  
 小サハ試み乳人抱ゆる若君を抱たりたる小若君ハ春彦の面をらんむひて忽  
 ち啼止むハ完示と笑せのひとれむ北方と先と乳人侍女們も是ハ不測ある  
 更くおとて乳人侍女們の手へ抱とれ又啼出ゆハ春彦が抱たるをよとれ啼  
 止のよハ是善卿も不審の更お思れ春彦と離小留て若君と守傳をよとれ  
 々の春彦も若君の斯別添ふ小付て御側を離する子ふ不忍山田の私宅小子  
 息春躬在て家敷と借る小更足と身ハ菅家小留り家主の如く昼夜とも若君の  
 側を去と守傳たたり此春彦ハ若君の頃より白髪より生三十才過てより頭髪  
 盡く白く成るも世人皆白大夫と異名する菅家の若君と推名と何子と又三と呼

々の三才小あせの頃より春彦を白大夫と呼ひて弥まハ馴睦のひとれ  
 小一時白大夫若君と肩まの乳人侍女も付添て物箱其歸路内裏の談天門の邊  
 を通りたる小若君春彦小肩まの額のついでとあめめハ小籠へ歸りおひて  
 後自ら小守ある手ハ筆と紙をのぐ談天の二字と書ゆ其筆勢自空空海和  
 尚の筆意小似るを是善卿と首と春彦乳人其餘の輩ハ驚嘆此若君  
 漸く三才小ありのひとれ手習ゆハ小内裏の額の二目と早く其文字と記  
 憶のひて書ゆのめあず筆勢墨色凡あざる凡人ハ在らず後世恐る事と  
 衆人舌を巻て心感是善卿御夫婦も是を奇と信御寵愛深く是より  
 若君を菅秀才とぞやする斯て七才あり春其頃博學宏才のやえ高麗都の  
 良香世都と人の許入門せられ筆道文学と學を各々小一を聞て十と知の  
 俊才あれ師の良香ハ驚嘆せり度及ひたり斯て文徳天皇の齊衡二



年菅秀才十才小なり其正月の半の頃春の夜の空快く零庭前の梅花も  
 咲白ひ梅月妍を争ひて限なく面白景色なり是善卿飽ねる余與  
 を催され菅秀才の向ひ你良香就て物学びされ持作の更をも少聞了  
 め今宵の風情を詩お作てんやと戯れ問はるる菅秀才唯くとて文も辞  
 する色もわく筆紙を扱て月夜即事と題し更小案と練の人体もわく  
 月輝如暗雪 梅花似照星 可憐金鏡轉 庭上玉芳聲  
 二首と賦とき出のひる是菅公詩と作も初なり是善卿大い小技を感  
 ぜれ你い成童の幸小なり至とて佳句と吐更予の猶及とて御賞美  
 あり我家を與すぬる者此見かりと申小未頼母を思はるる其後天安二  
 年十四小て臘月小獨與の詩を賦せれ其詩曰  
 玄冬律迫正堪嗟 還喜向春不敢賒 欲盡寒光休幾干

将来暖氣宿誰家 冰對水面聞無浪 雪點林頭見有花  
 可恨未知勤學業 書齋窓下過年華  
 と作りのひれを都良香大子致れ且感ぜれ菅秀才の才機我小勝る更遠  
 我身が師より更愧多小絶とて自己慚愧し是善卿の館にいら對面ありて  
 賢息菅秀才の御更智才當世其本不之者わし良香とて者者の門下小膝と  
 屈すぬる人ふあらず願く余人小就て學のめと辞退せられぬ是善卿敢て  
 承引かく何条さるる更のひれ唯ら道中門弟とて教導せむと強て頼れ  
 たり由良香も已更を得む此六師弟の君を除た學友と成てとも小文道を修  
 行いぬると歸られ其後心中小菅秀才を學の友とわひ愈懇小交られまると  
 あん儲清和天皇貞觀元年菅秀才十五才小ちりて元服のひれを道真と呼  
 ぶとて是善卿の御始に及むと北堂伴氏も糾あらず嬉とて鶴龜の千世万世

くけて菅公の初冠を祝し一首の哥と詠せしる其哥の曰

久々此月のうらもなるむらり家ののせむの吹せてしうけ

其後日四年十八才にて進士及第文章生補せし。六年二十才にて從六位下の叙し。九年二十三才にて文章得業生補せし。去番助進し。十二年二十五才にて正六位上の昇進し。十三年少内記に任ぜし。十四年二十六才なり。其年の春の比都良香の館にて若れ殿上人們聚り弓と射て與合多ると。菅公至りゆいふを人々耳に傳ふ。道真を儒家の生立常中罪を肉圖を出て字の意の虫雪と集り。字の業の心を委らるる。弓矢あては手かたり。さる更中。有す。本末の智を。下毎度手跡跡を。我徒彼人。後と取。友報。弓一手所望して。耻辱とせむ。と談合。あひ菅公の来りゆを待受。春日の長園か。弓響て。戲。い。あ。公。由。尉。心。一。手。響。ゆ。と。て。弓。箭。を。き。付。た。れ。也。菅公早く其結る意を察し。少の辞

する色なり。是ハと折ふ。矢り逢。い。で。我。一。手。仕。ん。と。て。弓。場。お。ま。出。り。箭。射。ち。つ。く。て。的。小。向。ひ。り。有。ま。る。射。と。治。り。整。ひ。て。射。術。鍛。煉。の。身。の。備。由。斯。中。を。一。手。射。り。人。々。案。小。相。違。し。ま。る。猶。形。容。を。う。賢。く。し。て。も。真。の。事。争。ふ。息。を。結。て。見。居。る。うち。菅公を。後。し。ひ。を。定。めて。矢。を。切。て。放。る。其。矢。過。る。的。の。真。中。小。發。止。と。申。す。是。を。始。と。し。て。十。枝。の。矢。一。枝。も。空。矢。な。く。尽。く。的。小。射。中。の。一。更。賊。小。百。發。百。中。と。申。す。る。矢。手。煉。か。り。ま。る。あ。そ。衆。人。惆。悵。我。を。忘。ま。て。呼。と。感。ず。る。む。ら。り。な。り。都。良。香。先。刻。より。物。落。下。在。て。見。物。せ。し。る。か。感。嘆。の。あ。り。ま。出。て。大。小。賞。美。し。種。の。出。物。を。進。せ。酒。宴。を。催。し。て。管。侍。と。り。其。後。元。慶。四。年。小。御。父。是。喜。卿。薨。去。あり。る。菅公。御。年。三。十。六。才。なり。其。翌。年。正。月。加。賀。權。守。と。兼。て。加。別。任。國。小。赴。た。り。以。次。の。年。任。滿。て。都。飯。り。ゆ。い。則。ち。其。年。渤海の斐頭。来。朝。る。由。權。治。部。太。師。と。な。り。て。存。向。使。と。な。り。ゆ。い。か。り。本。朝。の。各。臣。と。菅公の。御。身。上。を。や。め。り。と。云。く

猶昔公神と崇祭られの人の御事跡の巻を委く記す

陽成院憲鈎殿君御製 狂病乱行閑居條

陽成院の帝御成長カレの朝廷の公卿稍心を女ト多小不圖御狂病発て百  
般乱行ナリヨモ女官近臣們亦ホテアヤク其根元を尋ふ色情の更ト重  
起スリ其故ハ其頃鈎殿の君ト世ヲ雙ル美人在リ是ハ仁明天皇弟三元皇  
子時康親王後光孝天皇弟一の姫宮ホテ御座サセ陽成帝の御為ハ從叔母ト御  
年ト王上ト入違小長トのひる帝一度垣間見のひて深く懸想トひ干束乃  
御文を通せも鈎殿の君年々御甥の帝ト則添玉の流石トす愧  
うれ思思早一度御返一の文成もなすむを難面トの過させのひる帝  
ハいよ浮岩のひ一時二首の御製を遊なれ彼陸奥の錦木あど干束小余る文  
乃敷を封ふ切で返一の難面さ然れも怨今ハ玉の緒も絶むをう小物思

あんど物あつれあつめむひ一御玉草の奥小書てど贈ゆひる其御製ハ

筑波根乃峯よりつる川の急とはよりて淵とかりぬる

とあり御哥の意ハ常別筑羽中此面彼面の蔭深く洞より流出る水美奈野川  
といふ川落ち合底ちぬ淵とあり朕中君を戀る心の積りて深丸思小沈じど  
との周製たり矣や倭哥の徳ハ極武士の心成也慰め男女の中も和らし書言  
て鈎殿の君也此御製を唯トめて感情を催しひかめふやで清く思  
目とさのハ争難面ト止まるゆを御心解遂小箱船のひかふあぬ一御返事の  
文をせしめいれれ帝大御御成り候て迎へて錦帳の内小玉の枕とあを  
むい借老の御契深く是より鈎殿の君を片時も御側を放ちおま今チで君軍を  
蒙りゆひ一女御宮妃の果守トかくて枕の塵と俱積る怨のち方々各心と令  
て鈎殿の君を呪咀すハ帝の御行迹を悪く風統正叔母君と玉鉢近く目



異形の  
造り並  
釣殿の  
魔人園



寄て幸ひの六世の乱る端なりと云觸。或釣殿の君の帝の寢殿へ逼ひ  
 廊下種々怪たき者と造置て怖るるを素り心弱る御本性の鈎  
 殿の君度く悪鬼をもい遂に重病お歩臥ひる。帝大に驚きその典茶の醫  
 官小妻諸寺諸社小勅詔して加持祈禱させしむる。露の験もたず終に卒  
 成のひるふと帝の御悲歎限りたし。李夫人別と漢王の悲と揚貴妃後  
 唐帝の歿も今御身の上となり。哀涙お御衣の袂を汚し。是より何となく発  
 狂くおせり。局の女房の寐る處へ忍んで渡御なり。其黒髪を根より抜  
 くと剪捨せしむの鋒を以て寐る宮女の陰所を突て殺し。時申の久し時近侍  
 の臣下と糾められ御剣おて御手討せしむ。聊ても御意お叶はるまわれ。男  
 女の差別なく御太刀を抜りて追廻し斬殺し。その中傷けのふもウケ手彼鈎  
 殿を咒咀せし女官も亦御手討せしむ。維かの人なく帝の御狂乱鈎殿の

亡魂の為業なりと言出。や。夜陰おわを長陸中殿おて鈎殿の君の  
 瘦細り白た衣の上お又たる黒髪を振乱し。まも物凄れ面白く。停立のふ見受  
 怖る魂断て同絶し。それ心神悩乱し。病困む女房達も多々。帝お御狂病  
 愈厲し。一時八寮の御馬お駕れ。庭上より御殿へ騎上。宮女官人們を駈け  
 のい。又一時八官女を裸躰し。庭上追下し。大を闘はせ。怖る惑を與へ。或ハ  
 地下の男女と捉て樹の末へおせ下し。戟を以て突殺し。或蛙を多く取寄せせし  
 蛇小吞せ大と猿と噛合させし。ふを偏殿の討王の行迹お異なれ。後  
 と女房諸臣も恐怖て御前お忝仕る者人なく。斯て八帝位お在る。更奈何有  
 んと危踏ぬ人もたず。然不撰政基經公思慮を回らされ。一時君の御前へ伺候  
 し。頃只御徒然おんえさせし。明日臣が御舎おて三十番の競馬と催し。睿覧お  
 典へ。もういふお。御幸なく給ら。と奏せられ。帝お御生得馬と誣る。更を好

ませむ上御後、其の拍かれを大不悦なせり。細かく勅許あつるを、基経公疾  
 より二条陽成院の殿中小室を構へ四方小蚊手を入如何なる怪力勇悍の者なりとも  
 押破らるる中、小まつひ置帷を垂く是を隠し。翌日早且小御迎のさめ、内  
 々れを帝へ欺謀と露知むを空聲小来て出御がひひたり。基経公御隨臣  
 駕典丁們小密意を言合足早小陽成院へ渡御せ進せ。暗小御劍を奪とり  
 件の二室入より外面より扉を固く鎖されれを、帝大不悦なせり。是は如何計らひ  
 りやと問ふ。基経公威儀を正され、恐あがり君御狂病慕らせり。科められたる者  
 數多傷せり。ふかめ天照皇大神への畏り小御位を下し。此御所にて御保艱なせ  
 進しむらり願ふ脚心を鎮めし静小御養生はるる。と奏聞あり、帝大不  
 泣悲しむ。ひまむ小謝りとも叶せむと。遂小因居の御身とあせり。と力あは基  
 経公禁廷へ歸られ火急小使者を廻し緒卿を集へ、主上御狂病頻あるを

密位をすなせ奉り。此六何どの宮と王位小即なるを、評議あり。衆  
 其身々の具、肩の宮方と勸めて群議さす。決せず。左大臣融公正しく嵯峨天皇  
 乃皇子めれを、我こそ帝位を踐金とせ、其色を以められれども、基経公承引せ  
 られず。且人臣小列りたる人、踐祚あらず例あり。故仁明天皇第三の皇子の時、康  
 親王仁徳を備へ節儉を守り、己と小人を礼し賢君たれを、此君を九五の位小即  
 ちる小如く、すとき時康親王を五十八代の帝と仰せ、もんと定められ、大納言藤  
 原良世曰く、緒中納言在原行平曰、源能右と首とて満座の公卿面を見合し  
 彼時康親王と行迹正れ君あらず。御年己小五十五才、余り小年圃の以且先達て  
 甚死去あり。鈎殿の君の御父なり。彼鈎殿の死、靈内小先帝狂病を疾り、よりと世  
 小風説とれを、上皇の御憤りも量らず。又御舅、内前の宮と帝位小即られ、人更奈何  
 あらんと思れられ、當時權勢肩と並る人も、あはれ、謀政の釣かれを、維り一言と発する

人の中無り多む左大臣融公堪もて進出棋政の刻をら時康親王を帝位に即  
られん余りの似氣あらまらん再應思慮をからるる難せられん是を  
て緒卿双方の白をあらめ序唾を吞でひえ居るとまふ末座より藤原緒葛  
とて勇悍強勢の人位階を進み出衛府の太刀の柄を碎るむく小握結満座  
を吃と見廻し維う太政大臣の命を背く人々わると呼ぶと眼を瞑し二言と言斬  
ちゆくを死勢ひを示すも融公の緒葛が強勢小怕も其後刻を弁せられず  
口を懸んでひえられん是も依て遂に時康親王を帝位に定むる議評定一決し  
列位其只退出せられん抑基経公數多に在す宮の中小年園ゆり時康親  
王を吹挙し帝位に定められ深れ故めて全く和哥の徳小因とらなり其奈  
何といふ去年正月時康親王野外出て自身野辺の若菜と摘り棋政基経公  
の許に贈りゆひる小折や余寒強く若菜の葉小雪氷つられ一首の哥と添ふ

君がくめたる乃野の出ては菜つじ我衣幸小由きを降つ

と詠いゆひる也基経公右の脚哥と吟と大い感情と催され厚く脚札を上  
られん其時より時康親王を眞に負ふ心起まり素り親王の脚為性篤実  
貞正の君あらを旁に於て今般帝位に進められり時康親王仁明帝の皇  
あが文徳清和陽成三帝の御世を経て世埋れりも遠小暮りの世の人  
一品式部卿親王と稱し素り仕人もあらりも小思ゆり今度十善の帝祚  
小定より身心古骨再び脂が枯木小花の咲くも貴賤とも目覚り死更おれ  
たり平城嵯峨淳和の三帝を專ら詩文を好まむも朝廷の公卿皆詩賦  
作文小心を寄るも時康親王一首の哥の徳を王位に即せむいそ是より  
緒人歌道小心を傾け和哥の道大い興り追々名人も出来たり誠小後哥  
神代より傳り皇國振れて其徳測なり最中男女とも心掛つれ道なり

先孝天皇御即位

行平詠述懐歌彼為嫡條

時康親王其経公の吹舉依て遂小人皇五十八代の帝と崇められ是を  
 先孝天皇と奉じ則ち仁明天皇の皇子とて御母贈大政大臣総経公の  
 女澤子とせり先年渤海國の使者王文矩とい者時康親王を相し  
 此皇子大不貴相あり後年必出天位小即むと云ふ其初諸人信せ  
 ず王文矩相法不疎と排撻多其言のどく今晚年めて帝作と踐む  
 るのど諸人初て王文矩が先見の明かると感んたり又藤原仲實とい人よく  
 人を相し多其言不其言宗直小向ひ你時康親王小よく心を小て仕む  
 彼君の骨格尋常あらず後必と帝王あせむと語り是を王文矩  
 小必ざる相法の達人といを去程先孝天皇元慶八年二月三日小御即位在  
 ま一月年十月大嘗會と執行れ翌年正月仁和元年と改元あり先帝威小太上

天皇の尊号と贈りむ其経公の摂政を止れ関白たり是本朝関白の推す  
 かりそれ摂政の權を統るの義小て帝御幼稚不在す或は女帝若く先帝の如  
 く睿慮不正の君脚病身小て朝政を聽も更能ざる時の官職たり関白と  
 後漢の代より始むと云ふ関白と刻字義小て是君の裁判より更を関白と  
 下へ通達する官職たり至上先孝天皇其経公より御年長しむを摂政無用の  
 官名は是を止れ関白と云ふ其後関白其経公其経公の御子時平卿十六  
 歳賜り刺し其経公の五十の賀を禁中て執行せし其経公の御子時平卿十六  
 小成まかる成中禁中て元服するに至上御年づゝ冠と加ひはる戒小前代い例  
 なら義と諸人羨も思ひたりはる同年十一月仁壽殿小於て僧正遍照小七十の賀  
 を給ひたり是は遍照い良峯宗貞と言頃彼渤海の使者王文矩が来朝せし  
 時宗貞其饗應の役を勤め時康親王も同席と睦く交り進み御好身を



思臣の故と云。去程小帝ハ御博織カ上御年圃更ニ万機ノ政ヲ聽召小御裁判  
 明ク仁政ヲ專トスルハ小松ノ宮小在サ時市民モ亦ト小金銀ヲ借用カシ  
 成モ今度悉ク召出サレ利足ヲ加テ償イヲカシ多ク下ノ人民帝徳ヲ續  
 美シ天晴名君トシテ大不悦伏シ四海波靜トシ治リタル時小帝御生得遊豫  
 ヲ好サセシ神泉死小御幸シシテ鷹鳥ヲ放シテ池ノ鳥トシテ其他所ニ  
 御狩ノ御幸アリタル仁和二年十二月四日芥川ハ御狩ノ御幸ナリ云クテ或臣下ノ  
 中任セ中納言在原行平ト大鷹鳥ノ鷹鳥飼ト宣下シシク抑在原行平ト云  
 平城天皇ノ皇子阿保親王ノ嫡男トシ業平ノ舎見カレシ王氏ヲ出テ遠クテ弘仁  
 九年小誕生セシレ父伊都内親王養子トナリ且天性明敏聰慧トシ幼年  
 經史ヲ學ビ才機緒人小勝トシ天長三年在原ノ姓ヲ賜リ承和二年藏人頭小補  
 正齊衡二年從四位小叙シ因幡守ト任ゼラレテ其任國ニ赴ク折京ト出るとテ

忍びて通ふ女のりへ一首の哥と詠てつらつら其歌小曰

まろれりふむの山乃峯小なるまろろ一歳を今テ入リ云  
 此哥勝トシ秀逸ナリト世人賞美シあひ貫之由古今集小加ハシ斯哥道  
 小由達一博学宏才トシ經濟ノ道モ賢ク國益小成命ノ更ヲ是彼計定  
 けられ元慶六年中納言小任ゼラリ行平トシ鷹鳥ト使吏小妙ト得レ  
 りハ御相ノ中小行平小遺恨ある人君小勸めたり行平小鷹鳥飼ノ役ヲ命ジ  
 下不御得物ヲ云クハトシ奏シ是行平小耻辱トシ人ノ巧トナリ君  
 之何ノ御心トシせむトシ鷹鳥飼ノ宣下ありたり行平右ノ倫命ト奉リテ大不  
 不與シ我王氏ノ末葉トシ上中納言小任ゼラレ知余ノ齡ヲ過セシク果カ  
 役義ヲ蒙ルこと安クハト憤リタレト倫言アレヲ辞退センヤウトシ己更ト得  
 且澁小領掌ハ志カク心快クトシ樂サト疾小致仕セシク耻辱ハ蒙ル

まじきものをとて。意小浮むす。迷懐の哥と詠。一際花麗多。侍衣の袖小書付  
てそれを著。御狩の供奉小従。其哥小曰

公羽さび人あとかめを狩。つらゆらゆらと。田鶴のわくある。

哥の意ハ我々年闌て若く死狩衣を著ると老て蒼美と飾ると諸人咎ら  
らふ。更おれ是中今日むらと明日官職を辞す身なりと。公羽さびとハ老  
らる身小伊達を飾る更なり。凡て公羽さび小さびあど詠るハ爽々たる更おてちり  
寂る意ハ非と。神さびとら。社の巍々として。尊げお見。有更をりか  
然小帝路次。不斗行平の狩衣の哥と御覽ありて。大い逆鱗す。彼が哥と  
我王孫。中納言小任せられ。殊更年闌。小何さる。早芳の役を命。明  
日ハ仕を辞して。退隱の身と成。一の意を一首の中。あの人あおめ。とよと  
と。田鶴の啼。つらゆら。ハ朕を恨。不徳の君。世小。颯聴。とる。詠哥なり。

急だ追返。彼が官爵を削て。横洲須磨。流罪小行。と。皇目下。即ち  
勅詔を。中納言。行平と追返。と。執居。主上。還御。後。横洲國須  
磨の浦。を。左遷。せられ。行平。思。あ。罪。得。近。流。わ。獨。行。の。身。と。なり  
力なく。任。宿所。を出。津。の。國。須。磨。流。され。配。所。の。あ。ひ。と。矮。れ。飯。屋。小。入  
て。る。小。前。海。後。ハ。山。お。て。只。往。及。者。と。ハ。漁。する。漁。人。汝。汲。養。小。女。の。と。も。磯。の。松  
吹。風。の。音。も。寂。く。友。味。ら。す。千。鳥。の。声。も。哀。小。夜。の。枕。も。寐。覚。か。ち。ふ。る。物。支。物  
腸。を。断。る。ハ。な。れ。と。一。首。と。詠。と。都。の。友。人。へ。贈。ら。れ。る。其。哥。小。曰

こころ小回ひとあ。む。須。磨。の。う。ら。に。藻。汝。と。れ。つ。づ。と。こ。こ。へ。よ

斯て。憂。配。所。不。明。暮。され。る。小。一。日。の。朝。後。の。山。より。鄙。び。る。声。く。小。何。く。颯。つ。れて。數  
十。人。の。海。赤。女。濱。辺。を。望。で。来。る。有。さ。る。將。小。一。行。の。斜。馬。雲。小。連。り。半。天。の。雲。霞。地  
小。移。る。も。い。ふ。行。平。渠。們。を。ら。る。小。其。群。の。中。小。容。貌。鄙。め。ず。由。あり。げ。ある

二人の少女余の養子も後れ歩み疲れし体かええんむ行平家士生田庄司  
 向ひ彼後さ二人の養小女を是へ呼来れと命ぜられ小より庄司領堂へ走り  
 出三人の少女を待て久り。王君の目前へ連出て坐らせり。二人の女はいと畏入る体  
 て蹲り居り行平切をけ。你们は何國の者か何方の里か任かると問れん  
 む二人の年長はうと覺れぬ女庄司科紙を二首の奇と手早く書て。つ  
 ぐふさし出さるも。行平與ある妻お思れ手取上てん。其奇小曰

まゝ浪乃よする渚の世をすごとと延虫の子たれを宿めささず

と書り手跡も無下小拙うされ大い感ぜられ借優れ者どもうか実の  
 任所を告よと再三問れり小奇書る女答る。我々姉妹はりて讃岐國の者  
 みてさむいふ縁故ありて今此後の山の奥なる。田井畑の長が許小使れ侍  
 りと申さる。行平さて庄司向ひ你彼田井畑と申人。往其長とりの者小對面

此二人の女とすか洒掃不得きよと乞来りいへ命ぜられを。庄司唯くとく  
 座を起田井畑へ赴れり。行平二人の小女。何是と妻向て配所の後を慰  
 めらる。うち其日の黄昏。生田庄司田井畑の長を道にて立歸り行平の面前  
 へ伴ひ出さる。行平長小向ひ是か二人の女容儀早く。汝汝業とせん。便  
 かん妻はれむ。配所の洒掃せぬや。思かりされを。予得させよ。二人の女  
 の語る成歩む。元は讚所の産あり。如何なる故か。你方へ召抱。や子細あり  
 む物語よと問さる。長は低頭し。數ある。賤の女と申。由ある者と。脚覽ありし  
 御目鑑。を難有れ。此二人の小女。身上。衣は。衣れ。物語の。妻長。れ。も  
 御尋也。語り。抑些人の者。讚所の住人。塩飽大領と申。者の女。て。ゆ。姉ハ  
 七才妹。五才の頃。母死亡。後二年。まで。父大領。後妻と。呼迎。程。か。一人の男子  
 出生。一名。后丸と。呼て。大領夫婦の。寵愛。大方あり。す。後。彼。後妻。初。乃。程。二人

乃継子と所生のくく慈愛のひしふ后九が生せし後二人の継子と憎む万支難面て  
 のと過りとも大領の後妻の色も濁りて是を悟む姉妹の者憂苦を堪忍び継母  
 小より仕へ不継母八猶も二人を憎む夫大領小百般婉言し此両女と追亡人と謀りて  
 兩人とも堪りて館を抜出大領が家長年礼兵衛が者の方へ至り尼法師とも  
 かり亡実母の跡を吊ひえり告る小兵衛が主人の女といひし若れ姉妹と尼  
 法師おせん申いとをく八嶋の里小住居の一族高松何某と呼り者の方へ二人の者と  
 預置のひし小彼継母是を申付て又大領へ婉言し年礼高松兩人姉妹の女と金藏  
 て己く側室と御身死亡し後八后九を害しと塩飽の家督と押領せんと巧  
 りよ一妻小告る者のいと実や小告るも大領其絶と信し後添の勸小任せ年礼兵  
 衛と館へ寄物陰小カ士を隠し置年礼が油断ををぬカ士相圖し不意  
 小虜小牢獄へ入置し後妻暗食の中鳩毒を加へ遂小兵衛と毒殺し

猶もこの兄の阿波ぬある者小命高松何某謀叛のせえ隠し急れ弛向  
 て殊伐と告ると告る小より元来無道の阿波人一儀も及ぶ三百余人の兵卒と  
 率て高松が宿所寄付無二無三小攻まも高松の思がけぬ不意を伐と  
 防戦已小難義小及びく西人の小京對ひり矢と身はうる折小命と惜まぬ  
 ぬひたれ其敵中斬入て思程敵と怖斬死し命。御身も我知已  
 の者津國須戸の後も昇畑の長絆落行彼者小身を寄て命と全し時節  
 成待て父大領殿小身小罪あり妻を訴へ再び父子和順の期を得ると練小  
 是小の姉妹の者八杖柱とも頼る年礼小後高松と討死せんとり小力と  
 落し注し高松小向ひ妻姉妹也小御身成戦死を何の面目ありと小存命侍る  
 ぬれとも小自害し日道小往んと言る高松種々諫すに従者添て後門より浴  
 其身小遂小敵軍の中弛入り小敵を切腹斬死しと此両女八船小



皇女御會後篇卷五

五

我方(中)落(中)まり今(中)結(中)りい(中)わ(中)りま(中)は(中)遂(中)に(中)高(中)松(中)が(中)書(中)信(中)を(中)出(中)身(中)の上(中)と  
 泣(中)く(中)頼(中)む(中)い(中)ち(中)便(中)に(中)お(中)の(中)り(中)抱(中)て(中)今(中)日(中)まで(中)養(中)ひ(中)置(中)い(中)な(中)し(中)と(中)一(中)五(中)十(中)と(中)落(中)も(中)な(中)り  
 長(中)く(中)と(中)殆(中)ど(中)小(中)の(中)姉(中)妹(中)の(中)小(中)女(中)の(中)懐(中)回(中)の(中)涙(中)お(中)ろ(中)て(中)伏(中)沈(中)々(中)行(中)平(中)史(中)毎(中)小(中)感(中)慨(中)一  
 昔(中)も(中)今(中)も(中)姉(中)母(中)の(中)換(中)事(中)を(中)薄(中)情(中)多(中)し(中)を(中)二(中)人(中)の(中)女(中)の(中)由(中)有(中)ば(中)小(中)見(中)介(中)も(中)理  
 かり(中)予(中)此(中)配(中)所(中)小(中)在(中)ん(中)ら(中)ば(中)召(中)使(中)ひ(中)勅(中)勘(中)脚(中)免(中)を(中)蒙(中)り(中)帰(中)浴(中)せ(中)可(中)然(中)る(中)に(中)得(中)ず  
 有(中)り(中)予(中)年(中)園(中)て(中)若(中)死(中)女(中)左(中)右(中)小(中)召(中)使(中)を(中)好(中)色(中)多(中)し(中)思(中)ふ(中)者(中)も(中)有(中)ら(中)れ(中)ば(中)左(中)小(中)非  
 とも(中)只(中)配(中)所(中)の(中)徒(中)を(中)慰(中)め(中)ん(中)ら(中)ぬ(中)り(中)と(中)長(中)小(中)二(中)女(中)の(中)身(中)の(中)代(中)と(中)多(中)く(中)の(中)金(中)を  
 蒙(中)ら(中)れ(中)ん(中)を(中)長(中)小(中)悦(中)び(中)拜(中)謝(中)し(中)て(中)歸(中)る(中)斯(中)て(中)行(中)平(中)二(中)人(中)の(中)小(中)女(中)と(中)酒(中)帝(中)と(中)せ(中)れ  
 る(中)唐(中)山(中)吾(中)朝(中)小(中)も(中)雨(中)居(中)す(中)身(中)八(中)松(中)風(中)村(中)雨(中)を(中)友(中)と(中)す(中)あ(中)ら(中)れ(中)ば(中)と(中)其(中)小(中)準(中)一  
 妙(中)を(中)松(中)風(中)と(中)呼(中)妹(中)を(中)村(中)雨(中)と(中)号(中)て(中)憂(中)を(中)慰(中)む(中)便(中)と(中)せ(中)れ(中)其(中)后(中)三(中)年(中)まで(中)流(中)罪(中)息  
 免(中)の(中)宣(中)旨(中)と(中)蒙(中)り(中)飯(中)浴(中)あ(中)り(中)折(中)松(中)風(中)村(中)雨(中)小(中)敷(中)の(中)引(中)出(中)物(中)を(中)与(中)ら(中)れ(中)ば(中)二(中)女

大(中)余(中)波(中)を(中)惜(中)泣(中)く(中)御(中)見(中)送(中)を(中)平(中)て(中)後(中)姉(中)妹(中)と(中)小(中)髻(中)と(中)り(中)て(中)互(中)と(中)な(中)り  
 亡(中)母(中)及(中)小(中)年(中)礼(中)高(中)松(中)の(中)後(中)世(中)を(中)烟(中)小(中)吊(中)ひ(中)な(中)し(中)と(中)ん  
 清(中)和(中)上(中)皇(中)御(中)登(中)霞(中) 禁(中)廷(中)種(中)怪(中)異(中)之(中)條  
 前(中)太(中)上(中)天(中)皇(中)和(中)陽(中)成(中)上(中)皇(中)の(中)御(中)在(中)病(中)と(中)歎(中)れ(中)り(中)是(中)朕(中)兄(中)宮(中)惟(中)喬(中)親(中)王(中)一(中)且(中)の  
 辞(中)讓(中)も(中)な(中)り(中)帝(中)位(中)小(中)即(中)小(中)天(中)照(中)太(中)神(中)の(中)咎(中)も(中)な(中)ら(中)ず(中)あ(中)ら(中)し(中)追(中)思(中)石(中)悔(中)せ(中)む(中)ひ  
 遂(中)小(中)御(中)落(中)飾(中)在(中)斗(中)敷(中)行(中)脚(中)の(中)と(中)て(中)近(中)江(中)丹(中)波(中)撰(中)津(中)小(中)の(中)山(中)寺(中)と(中)順(中)拜  
 かり(中)し(中)ひ(中)る(中)是(中)偏(中)小(中)後(中)太(中)上(中)天(中)皇(中)の(中)御(中)狂(中)病(中)御(中)平(中)愈(中)の(中)と(中)と(中)中(中)不(中)の(中)後(中)も(中)至  
 尊(中)の(中)御(中)身(中)と(中)て(中)煙(中)く(中)緒(中)圓(中)行(中)幸(中)ゆ(中)か(中)以(中)更(中)お(中)其(中)御(中)在(中)所(中)を(中)定(中)め(中)お(中)は(中)れ(中)手(中)上(中)の  
 是(中)我(中)患(中)ひ(中)り(中)前(中)上(中)皇(中)小(中)近(中)侍(中)奉(中)る(中)公(中)卿(中)行(中)幸(中)の(中)度(中)毎(中)東(中)西(中)南(中)北(中)走(中)り(中)て(中)殆(中)と  
 迷(中)惑(中)一(中)々(中)一(中)時(中)閑(中)白(中)基(中)經(中)公(中)上(中)皇(中)を(中)種(中)く(中)練(中)養(中)し(中)な(中)れ(中)る(中)小(中)太(中)上(中)皇(中)仰(中)る(中)る(中)朕  
 近(中)國(中)の(中)壘(中)塲(中)と(中)拜(中)巡(中)る(中)更(中)朕(中)身(中)の(中)後(中)世(中)佛(中)果(中)の(中)為(中)お(中)わ(中)る(中)と(中)後(中)の(中)大(中)上(中)皇(中)の(中)狂(中)病(中)平

命を祈えんあかり。朕近國を巡るとも敢て他所を尋る事及ぶ。丹洲水尾山乃  
 奥なり古木の檜の下と朕が居所とす。其の要所あり。右の檜の下に到り待て朕  
 たく他所へ往とも遂に水尾山へ還るなりと宣ひ。多し。基経公も諸臣下の人  
 くも漸く心を安んず。其後又例の如く。儀の事も出御なり。更にお還御お  
 し。むざれ。臣下の面く。さむ。丹洲へ御迎お奉れ。と。衆人水尾山へ登り。さむ  
 果て年経檜の天樹あり。樹下の塊の岩あり。其上に上皇の御座具あり。板  
 と兼ての勅詔あり。此所へ還御なり。と。一日と待たせ。さむ。更にお還らせ  
 らる。命なり待て。山奥にお御座る。更にお山残る所なり。尋なれども  
 更にお入らぬ。是は不審なり。と。都へ人を遣せ。閑白殿。斯と祈へ。れを自余乃公  
 卿も追ひ。水尾山へ馳着群集。て丹波二國の山々を尋ね。もれども猶御在所相知  
 じ。諸御手と空して。忙と。惆果多し。入の臣下。彼岩上の御座具の。の外。薫り

ぬる。如何と。列位。氣成鎮。鼻息を。嗅。実の御座具の香氣。御  
 羅沈香の勝り。馨。後にお漸く。香氣高。なり。金葉山中。満。り。を  
 人々奇異の思を。議。して。曰。昔天智天皇。崩御の後。御座具。御香の遺り  
 有て。尊。無。り。と。登。天。と。謂。り。今。上。皇。中。正。昇。天。と。言。ふ。方。々。と。し。て  
 む。何。時。や。此。所。に。待。ち。も。も。其。詮。有。ら。ず。不。如。都。へ。還。り。此。趣。を。奏。せ。ん  
 小。八。と。衆。議。一。致。御。座。具。と。も。皆。都。へ。還。り。有。り。次。弟。と。奏。聞。し。れ。帝。頗。り  
 御。疾。死。あ。り。普。く。日。本。國。中。山。の。奥。浦。の。端。に。宣。旨。傳。ら。れ。前。太。上。皇。の。御。行  
 方。を。尋。ね。せ。り。終。小。見。え。せ。む。と。傳。へ。跡。昇。天。と。い。ふ。事。極。ま。り。と。即  
 ち。水。尾。山。を。陞。り。清。和。天。台。と。名。を。奉。り。時。小。室。集。三。十。一。才。小。か。せ。り。水  
 尾。山。を。常。小。愛。り。ひ。り。水。尾。帝。も。や。ま。れ。と。実。小。不。思。議。の。御。事。あ。り。其。後  
 至。上。御。方。違。の。御。幸。在。り。夜。の。路。次。に。盲。人。數。十。人。亦。連。ぎ。ら。る。敬。言。繹。乃

宣吏の追々大い周障途を送ひ多と主上密輦の内より脚覽在り不便乃  
 更小思召還脚の後脚沙汰ありて浴中左牝牛とて街小店屋で建させ無縁乃盲  
 人を其所小て養ひ住せし且盲人の宦階を定めり其上座する盲人を座  
 頭と言ふ人せり。實小盲人も者此君の脚哀憐を仰ぎ尊むる脚吏あり後  
 年帝統崩脚在りて後緒國より盲人們都へより先孝天皇の御忌日と吊ひ奉  
 るとて三条四条の川原の群集し七月廿日より廿六日まで脚追福の法事なす更  
 年恒例となす。緒人は是をんとして川原群集す。残暑の節かれは是を納涼  
 と綴り但し脚正忌八月たれも脚法事と七月の執行の干藁盆會を兼行意  
 とす。今あ世盲人の宦位を久我家より免授けらる。我ハ光孝天皇乃脚末  
 華族の故なり。盲人の宦位の名目ハ右川原の脚吊ひハ四々度上りる者と四々  
 ハ々度上りる者と四度と号し十六々度上りると勾當と号し十六々度上りる者を檢校

と号す盲人の極宦とす凡盲人を疑ひ深死者ありて已們日士集會するも座席乃  
 上下と争ひて稍めすれを闘争あり及る小斯宦桂の掟定より其争ひの止る  
 偏小光孝天皇の脚仁恵因とて難有る仁君なり  
 因小曰今京都の做ハ六月の祇園會より四条川原緒人群集すと納涼と  
 稱するハ右の盲人の川原にて法事なすと見小集り遺風なり  
 時小仁和二年の冬より三年の春へけて大衰小種々の怪異あり其二を一日  
 禁廷小大いなる曇の集る更幾百子とて數まれず其形常の曇とハ大い異ありて腹  
 大い脹れ眼の玉も大い黒く光り皮膚の班々五色小て見小穢小く這更甚小  
 徐小て啼声長く悲し。衛士の輩大い怪し。多人數ありて是を門外へ追出さんとす  
 小逃る更もす。徐小てより脚門外へ出るるとる間もな。又跡より忽ちと數  
 這出更小徐限かり。衛士も大い困り果攫を以て捨捨れ。又其あとより現出



後く小大床(這上る小)御殿の簀子の下より長大蛇數千這出て上り来る暴  
成呑んとす衛士も又是を怪むる攫退る小めて余せ暴成れが却て僂倖の  
妻よと攫を止てあめ居るの尋常ハ蛇蛙を吞むひある小其トハ妻変り  
暴ども口と張て蛇を吞る其勢ひ甚る恐る或蛇の首より吞めあつ或蛇を二  
小啗切て吞めあつ其他種く小して遂小蛇を吞る。暴ハ勝鬪を揚がごとく一尋小  
鳴て人も追ざる小御門の外(這出悉く消失る)諸人評して曰是ハ先帝成蛙を集  
蛇小吞せて身づのひ其剛ひを示すおんと言合り。す時御坪の内松乃上  
異形の人まで手小弓矢を携へ矢を放つ妻毎夜止て其矢の落る所をひ小攫ども  
敢てまれば直宿の衛士樹上の怪死者と弓矢と射小矢の中る時ハ消矢の間  
ゆなく又現れ矢の中る時ハ唾と口ら其笑声ハ數十人の声のごとくあれども現れ  
者ハ人なり是も諸人の評ハ先帝罪ある者と樹頭ハ下せて射殺しゆい其怨

霊の所為か下と沙汰り。右木の妻を先とて或血亦漆裸躰か女の停ま  
をへり者中あり或ハ無首殿の歩行す也区者中あり其風鏡宮中宮外小隠なく  
女房達ハ怕惑の帝ハ睿聞在て患ひのひ多小仁和三年秋の初より重死御怒小  
浴せのひ多百官百司大不致か緒寺緒社ハ命とて加持祈禱を修せり和氣丹  
波の医官良劑を粹て御茶と調進一献とて更小其強かり遂小八月廿六日室  
算五十八女小て萌脚かひひるを哀れ御在位僅三年なり女御宮妃緒皇子  
姫宮の御數中も更か小公卿大夫の愁傷大方あらず下市人農民ハ悲泣せ  
るハかろろなり。是れもまた有思べき小あれを御葬送の儀式を整へ葛野郡立  
屋の里小松原多田邑の陵小葬り奉り。其後諒園中畢て仁和三年丁未十一  
月十七日春宮定省親王を関白基経公大極殿(誘ひま)り五十九代の帝位小即  
奉らる。宇多天皇とやせハ此君小て在せり。御母皇后班子と仲野親王の御女

たり。此君ハ先孝帝弟七の皇子にて此時二十才カセリ。先帝孝皇子數多在  
 中々多し。親王小松宮小あり。時是忠是定定省の三人の皇子と名れ  
 脚戲れ。自然予帝位小登を你達何更を望いやと問せり。小脚嫡子是  
 忠ハ汝等賜り。仰れ脚二男是定ハ東國を賜り。曰ハ脚三男定省ハ春  
 宮小ままり。とて曰ハ。さる依て先帝脚即位在て後定省親王を太子小  
 命。今度万衆の密位小即せり。多と芽出度。今此君兼て内々王位を踐  
 ち。との脚望ヤ。くも。侍従。多。頃。時。賀茂社ハ脚社  
 あり。祈願を篋。世人更知。小君登極の後寛平元年。改え。ま  
 ち。其年の十月脚祈願成就。脚欣悦。因て賀茂社小初。臨時の祭を執  
 行。神慮と清。其外正月元且小四方拜の儀式。此帝より始。多  
 月七日小七種の脚詔を献す。更ハ此君の脚宇と。始。主上。諸臣下

小忠勤を励と為。南殿の庇ハ障子小唐土代ハ功臣の画像を繪所  
 巨勢金岡小命。描り。是を賢聖の障子と稱せり。南殿左右の庇小建  
 東西南各十二枚。つ。都合二十四枚。其東方の障子小殿の伊尹。周の太  
 公望。漢の蕭何。曹參。灌嬰。傅寛。王陵。唐の杜如晦。房玄齡。虞世南。魏徵  
 長孫無忌。以上十八人。西方の障子小殿の傳説。周の周公。且漢の霍公  
 魏相。蘇武。劉禹。杜茂。唐の姚思廉。孔穎達。陸德明。褚亮。許敬宗。以上十二  
 人。抑巨勢金岡と。呼。一。画。其。頂。無。双。の。名。人。曾。て。大。内。の。教。の。尸。小  
 馬と描。多。小。其。画。馬。每。夜。抜。出。て。脚。坪。の。教。と。浪。ひ。と。多。る。名。画。之。の。丹  
 絨を凝。て。面貌。佩。帶。と。多。く。の。傳。と。勘。考。寫。し。出。せ。一。画。を。左。に。活。る。が  
 如。く。言。語。と。の。声。乃。は。多。く。我。耳。の。聾。事。か。疑。を。り。多。く。君。と。首。と。り。群。臣  
 其。精。密。と。感。歎。せ。ず。と。り。人。ハ。後。年。延。喜。の。帝。の。脚。宇。小。野。道。風。小。命。て

此人物の續を書きつゝの弥潤色せしむ此障ぶなり。如此聖明の君おて在す上小  
園白基経公藤原良世卿菅原道真卿と云ふ良臣補佐ししれれは万機  
の政正し四海昇平にて万民業と樂む戸もぬ御代とと秘する。

都良香得鬼神奇句 菅公一時作十詩條

宇田天皇を補佐しし名臣の中も菅原道真卿八前中も詠しし人にてハ  
在まじ。不測の憂ももまらりたる。其中の殊小奇異なるハ彼都良香一時初春乃  
頃まじ。消えたる正月の夜半おる臆お霞む月の面白死す奥小乗とて邸舎を  
ま出其所ともなく逍遙し。寛ぎ東寺の羅生門の辺にり柳の風小吹乱さ  
たんと。不斗心頭お浮む。 氣零風梳新柳髪 といふ句を得申  
小是を我おとる名句と得たり。此句お相應するは對句もがわと稍停まて案  
成煉まるとも。是とて思ふ對句も浮まらるる。忍ち羅生門の棟小其形

怖ろし鬼神現き出高声介 水消波洗舊苔鬚 一 唾どる良香大

小我れ我句お對して吟らるる天晴秀逸の對句ありれを斜あす悦び是

鬼神我を佐て此金玉の佳句と給りと拜謝とて心も勇を欣榮して我邸舎へ

歸らるる。翌日道真卿入来ありれ。良香右の二句と書てさ出。昨夜此

一聯の句と得し高判とてけり。下と書されたる小と道真卿手小とて押頂き

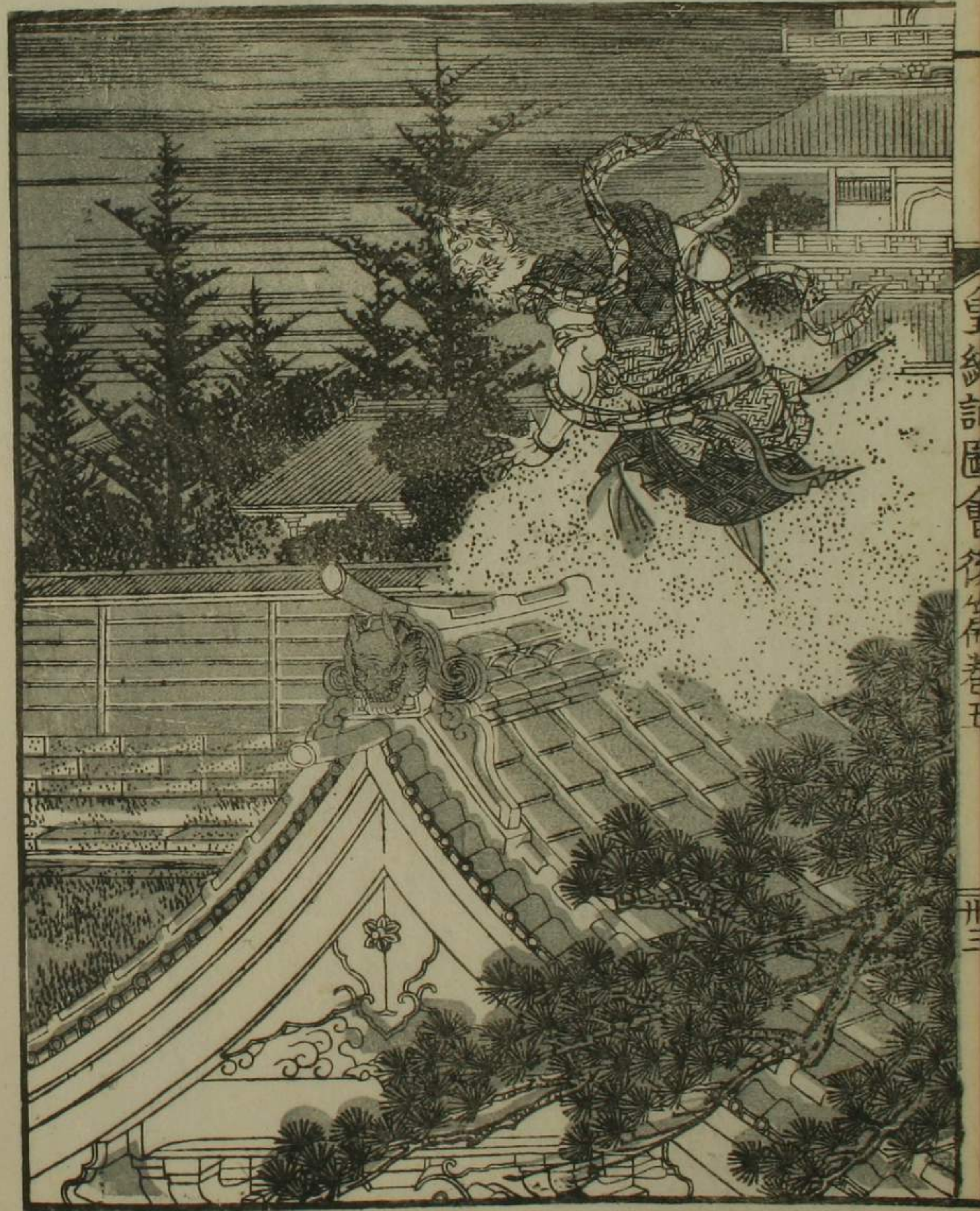
先上の句と吟。次の句と見て何とも思ひのひえ。扇を用て居置座を立て手

洗の浄め袈束と刷いて正しく坐し。良香心中小此人皆くおて我  
小物學せられ。師弟の礼義と重んぜたる感有りと思ひ是ハ慇懃なる脚  
変らるる。小道真卿答て。吾左小ハハ。前句と  
脚自作おていれ。後句ハ人間の作おす。必定鬼神の句おていれ。一  
ハ敬ひたりと仰る。良香仰天て心中小此人ハ人おす。神小通せられ



皇統己酉會後卷五

廿四



皇統己酉會後卷五

廿三

けりと驚嘆し自作ありと言し更の今更恥く後悔して誠小卓見の程伯  
 入いかり。実ハ如是くおていと有し次第と語れれど道真卿も微笑しむし  
 実さる更おていなり御作の絶妙あり感し鬼神對句と呼ぶるがれと両句も  
 御自作同並しおて返されりごと其後寛平二年の春續岐守小任せられ任國小  
 赴たの二河の政勢と裁判あり南條郡滝の宮の官府小任しむして暮春の比松  
 山小遊び風景を眺望し入真のあまりの二百の詩を賦り其詩小曰  
 低翅沙鷗潮落曉 乱系野馬叶深春

然小其年の四月より七月のころまで雨降ど早續け農民大困窮しを  
 道真卿是を憐れむの城の山の神小祈誓し祈雨の壇を築れ是小登りて  
 丹絨と凝し雨を祈りて小第三日雨より大雨降出しさかかろ盆を傾るごとく  
 三日三夜小止むなく降徹しつる小市人農民腹鼓を打て躍り舞怡お更

限りなく一國の人民皆道真卿の盛徳と深く感し此殿永く此國小在りと祈り  
 因小曰續州滝の宮の里人を今て七月二十五日例年滝の宮おて踏哥をな  
 天満宮と祭りなる俗是を滝の宮踊と称すと云く  
 斯て道真卿御覽平三年任滿都遷りし式部少輔小任せられ左中弁を兼  
 りの程なり藏人頭小進し又曾て宇田天皇の勅命小依て類聚國史と云る  
 書と撰りひるが今年落成と献し二百卷の大典して本朝小いす斯程乃大  
 部の書籍有まなり是日本書紀より以下の曆史のまと集り部類を分ち人の考  
 見小便よれり小帝大不慮感在し其功勞と御賞美ありてま御褒  
 賞と賜りりり今年関白大政大臣基経公薨と云る悪瘡と患り小重り  
 終小患去ありる遭齡五十三才なり帝深く惜ませり照宣公と謚を給りて  
 御子息時平と参議小任りり四年菅原道真卿参議小任せられり

五年弟の皇子敦仁親王を春宮小立むり。此時帝の睿慮とて時平の妹と  
 以て春宮敦仁親王の御息所小立の道真卿の御女とて二の宮齊世親王の  
 御息所となり。久し。日辛九月道真卿古歌三百首と撰出。新選万葉集と  
 題し。上下二巻なり。奇一首毎小御自作の詩を副り。詩數さる三百首也  
 日六年八月遣唐使を立らんとて菅原道真卿を大使と。紀長谷雄と副使  
 と定めて入唐させられんと。事其準備をなさせり。ひる。其頃唐朝小叛臣百  
 て兵革起り。唐の代大乱と。由は。遣唐使の義と止り。日七年小  
 左大臣源融公薨去有る。壽七十三才なり。然小帝八御生得御病小在。せ  
 朝政を聽せり。思召一時道真卿を召れ。朕が身病小て朝政を聽  
 台心りがちなれ。万民の祈。松滞りて。恐る。世の憂愁とな。下。され。帝位と  
 子小。幾人と。母。如何と。勅。問あり。多。道真卿色を平。ひ。是。ハ。勅。紹。下。て。い。

とも。恐。か。君。の。ま。御。老年。と。や。む。の。い。と。春。宮。猶。御。幼年。小。立。せ。む。ハ。御。位  
 成。讓。せ。む。ハ。更。並。む。が。す。の。君。御。病。小。在。す。と。朝。政。の。義。ハ。臣。等。と。も。く。も。執  
 計。ら。ひ。な。り。今。ま。ど。く。世。成。治。せ。り。と。練。奏。あり。多。小。より。帝。勅。許。在。て。御。讓  
 位の。御。沙。汰。ハ。止。小。く。今。年。六。月。道。真。卿。五。十。才。あり。せ。む。を。其。御。年。賀。を。祝。し  
 進。せん。と。て。人。達。貴。申。賤。由。吉。祥。院。と。い。ま。お。奉。會。し。詩。奇。の。題。を。探。り。て。慶。賀  
 の。意。と。述。酒。宴。と。催。と。延。年。と。賀。し。多。小。一人の。老。翁。葉。香。を。行。纏。し。め。る。が。裏  
 の。沙。金。と。文。人。の。未。り。賀。筵。の。文。臺。の上。小。置。何。と。申。言。で。と。去。る。小。と。人。々。不。定。算  
 みの。道。真。卿。の。詩。と。達。し。な。れ。即。ち。其。文。を。披。丸。入。り。其。文。辭。小。菅。家。の。人。人。們  
 師。の。知。命。と。賀。せ。し。多。小。因。て。此。沙。金。を。贈。る。なり。金。ハ。思。ふ。心。の。狂。く。ぬ。成。表。し。沙。金  
 壽。の。數。限。り。か。人。更。を。祈。る。多。小。あり。と。あ。り。難。が。所。為。と。も。不。知。し。後。日。小。帝。乃。御  
 所。為。なる。更。相。知。り。滅。小。御。負。の。睿。慮。の。程。と。難。有。り。多。小。時。小。春。宮。敦。仁。君。ハ

御幼稚の時より学問を好まされ万賢しく御座ると時道真卿(今昔を  
下され我聞唐去一日小百首の詩を作り人是彼数人有とす。卿幼稚の時より能  
詩を作り況今文学小富才智其右小出者なり。彼一日小百詩を賦せし物久七  
歩小奇句を吐し又由劣将予依て一時の内小十首の詩を作てんす。とて題  
成給り名を道真卿少も詩一むす領掌あり。其日の酉の刻より成の刻の初まで  
小安くと十首の詩を賦して献りゆひたり。其中小殊小秀俊とせえしは

送春不用勸舟車  
唯別殘鶯與落花  
今宵旅客在詩家

右の詩は後年大納言公任朗詠集を撰り時加られたり。其次の年道真卿春  
宮の御所へ参られ多小敦仁親皇仰多去年一時小十首の詩を作成りて卿の宏を  
を知れ足りと久も試小今二時の中小十首の詩を作てんやと望りゆひたり。と云

御変小いして更不辭しゆ色ゆか。酉の二刻より成の二刻まで。只一時の中小二十題の

詩を作て献りゆひたり。親王も臣下達も其達才を感し前代未だ例を聞

か後世亦有す。た又機ゆゆと賞美せられ。右の詩三首、失て十七首菅家

詩集小いへり。曰九年の春藤原時平と大納言任し左大将と兼りゆれ。菅

原道真卿を推大納言小任し。右大将を兼り。斯て春過夏小ゆなり。多小

帝ハ度々御不例ゆづり。母ゆふり。又道真卿を召れ春宮脚躰位あられ。首を

勅詔ゆひられ。道真卿奉りゆひ春宮已小十三才小あせゆひ殊更聰明睿

智の聖君小て在せ。御躰位の義滅小可然ゆと勅答あり。多小帝御欣悦在り

曰年七月十二日春宮敦仁親王小脚元服させ進せて万乘の密位を禪りゆひ。脚

身ハ脚飾と落させゆひて朱雀院ハ入せりゆひたり。まうあゆり。亭子院の君とゆ

又寛平法皇とゆもなり。吾朝ハ法皇の尊号有此帝より始りたり。

皇統詩集卷五 卅五

醍醐天皇御即位

時平乱行奪叔父妻條

春宮敦仁親王人皇六十代の帝祚小崩ゆひ此君を醍醐天皇とす。即ち先帝中第一の皇子にて御母勸修寺内大臣高藤公の御女御子とす。世小承香殿の女御とす。なり。寛平五年春宮小立せり。同日九年十三才にて登極し。ゆり。年号と昌泰元年と改元ありて。先帝小太上天皇の尊号と奉りゆひ藤原時平と菅原道真卿と西卿相並んで朝政を執行せり。其義大臣小准せり。是當時大臣の官なれり。抑道真卿御年五十才天の生る英才にて和漢の經史小涉むゆ限もなき。博學多聞あり上忠直篤行の君子なり。又時平八照宣公の嫡男にて其家系小於に双者あり貴族とれり。生年とす。二十七才也。好色放蕩あり。のち。己を慢し能を妬む性あり。道真卿と天地雲壤の違かり。時平乱行の第一と。時時平我館。日果阿利。彼後と

聚て酒宴し。雜談せし。る中。小當時世小勝る美人といひ。維あり。を問れり。平貞文といひ。者各て。當世一の美人とす。君の御伯父大納言。因経卿の北堂小勝る女性。かといひ。言多と。時平耳小由。其夜の酒宴果て皆退散し。り。翌日叔父因経の許へ使者を遣し。子細あり。夜貴館へ方違小参。ら由言せり。む。因経。我甥か。り。當時推勢肩を並る人あり。時平の頼あり。を二儀あり。及ず。承引の旨返答して。使者を返す。俄小山海の珍味を取寄せ。せ。即中掃淨。ま。りて。饗食應の準備を細相待れり。小其夜時平意小適。一輩と同伴して。叔父の館。到り。れ。因経大。小尊敬して。忠殿。清。傾て酒宴を。す。り。善。美。を。尽。して。饗食應。に。官法を。奏。し。歌舞を。行。せ。せ。兵を。添。られ。る。諸酒宴の。半。酣。小。及。び。る。頃。因経秘藏の琵琶を取出して。引出物。と。時平。進。せ。られ。る。小時。平。謝。して。此賜も。忝。か。れ。る。今。宵。の。御。饗。食。應。小。北。堂。の。見。参。小。入。ま。り。り。



と望まれぬを因経の何の氣も付ず。夫と最安に御更なりと。北堂  
は呼出し時平を拜せし。和琴を弾せし。元来因経は年稍闇て北  
堂のよき若かりしを平生小夫を厭意ありし。時平は初て叔父の妻を  
んろろ小貞文が言し。も十倍増し佳人なり。窃窕なる顔は桃李の如く。婢  
娟る姿揚柳小似て。羅綺なる堪ざる風情艶小あつたりのあす。春華の  
をて襟りて。寒くもむる小。色好の時平。忽と眼を奪われ。魂を湯に頓  
小目とて情を送り。あつて心成り。北堂も折し。時平の方と。りれり。因  
時平。信心動れ。左右りて。因経小。酒と勸め。酩酊と。んと巧され。因経と  
時平の心術を。知す。推し。數盃を。傾け。果。前後と。忘る。と。小。酔。酔。す  
れ。多。時。平。見。す。と。叔。父。小。向。今。宵。の。卿。食。應。ハ。穢。小。と。遭。が。盛。饌。あり

庶幾ハ今宵の御引出物小北堂を我小賜らんやと。傍若無人小所望せられ。小因  
経ハ大に酔まれ。折あれ。只是當座の戲言あり。心得何の思慮も。あり。即所望と  
あつて。因経ハ。命も進す。増て。況。妻小。於。也。具。て。還。り。と。り。れ。古。小。各。其  
小。席。上。小。醉。伏。れ。る。時。平。仕。する。と。と。独。笑。北。堂。を。無。体。小。引。去。席。と。ま。て。去。園。出  
婦人。を。我。車。抱。り。乘。其。身。也。小。乘。て。我。館。へ。還。ら。れ。る。誠。小。乱。行。も。無。道。も。  
論。せん。や。多。行。茶。が。り。り。因。経。ハ。夜。風。の。身。小。寒。小。醉。醒。て。眼。を。覚。座。邊。を。見。れ。ば  
時。平。下。小。還。ら。れ。と。覚。只。不。盃。盃。の。狼。藉。る。斗。成。も。近。侍。の。女。房。小。北。堂。の  
義。と。同。じ。多。小。女。房。各。で。前。小。時。平。の。君。御。臺。所。を。引。連。て。ま。ひ。り。何。方。伴。ひ。ま。ふ  
や。と。同。じ。侍。小。叔。父。君。の。我。小。賜。り。と。侍。て。帰。る。かり。と。曰。ひ。て。御。車。小。乗。す。り。せ。御。身  
由。と。小。乘。て。歸。り。ま。り。と。言。ふ。小。因。経。ハ。外。小。孩。れ。我。酔。醒。と。何。更。を。言。り。更。小  
覺。す。時。平。も。酒。興。小。乘。り。當。座。の。戲。れ。小。侍。て。帰。ら。れ。り。急。い。て。迎。を。遣。は。せ。よ。と

使者と時平の館へ走らせ。先刻光駕と曲られ忝くは但し御座真小患妻を召連  
 御帰有し。國経耽酔して御見送付し失敬の罪を免れ賤妻を歸し給ふと  
 遣され多し。時平執奏の青侍を以て先刻八種く奔走預り怡小不堪其砌堂  
 を御引出物小賜りし。辞退し及む具して還りぬ。上今更返し進せがうと言  
 せ敢て返されざるを使者中為方なく立歸て。主人小時平の及答の趣を告る  
 ぬ。國経因果最愛の妻と奪れ。妻あね身と燈と恨も憤れぬ。當時執政  
 の時平もれを奈何とも仕が。無念ながら其休き置れ。時平ハ彼婦人を奪とり  
 てより昼夜側を放さず電愛し。遂小子と儲られ。後小中納言敦忠平ハ是より  
 此北堂ハ在原某平の子息棟深の女と。是小依て世人知も不知も時平の不義我  
 意を爪弾く憎と讒且ども其推勢小怕と難く入表向て諫言す。人由無り。時  
 斯て昌泰二年己未の二月。帝の睿慮して時平と左大臣小任し。道真卿を右大

臣小任し。此時より道真公と世人管丞相と稱し。丞相ハ大臣の唐名なるも。又  
 又此時帝の外祖藤原高藤。仁明帝の皇子なる源光二人を小い。大納言は。菅  
 菅公中。小思召る。時平ハ照宣公の子息。大臣の家柄なれ。左大臣小任し。吏  
 吏理の當也。我ハ儒官の卑なり起りて。家小例なれ。右大臣小登用せられ。其位貴  
 族も高藤光等の令より。上小吏。先年渤海の使者裴頰。我を相し。位  
 三小昇る。高官小居。身小災害及。先見符節を合す。如  
 九國家の為存。身小禍の及。忠臣も者の厭。小あ。貴族と兼。其  
 其上小入。高天ハ畏あり。表と奉りて。再三臣位を辞し。王上由上皇中敢  
 て勅許なり。時平ハ若冠なれ。彼を佐て。朝政を正らす。倫余れ  
 己更得ず。其休小過させ。斯て時平と菅公ハ月交小朝政を聽れ。小  
 時平ハ母度依。估員負の裁許。諸人恐。其當番の月。新松人。多

菅公ハ裁判平ノ由仁恕を旨として新裁聴ヨ我猶人の如クある由ハ裁断少  
 滞リありて諸人悦伏。御當番の月ハ自然新入少。衆人菅公明断と感  
 賞美する小付て。時平の不決新薄徳を排ぬ者ハ多ク。左府の時平  
 を以て菅公の名譽を妬之君小純奏して官位を削落せんと思れれども素リ  
 忠正の菅公一点の御過失も無かれ。純奏す能く種もなく。あれ妻が出来ようと  
 思え。系小彼源光ハ菅公小位階を超え。無念小思ひ時平小阿利指ひく  
 俱小菅公ハ退人と謀リ加えあらず。泉大將定國。大納言清貫。右中弁希世。藤菅  
 根平貞文。紀蔭連。日未左府小阿利。菅公ハ妬之。時平の館  
 小會令。専ら菅公と追退く。死邪謀。高議。

扶桑皇統記圖會後篇卷之五畢

